

北満の記録(三)闘病

陸軍病院

昭和十九年十二月も半ば頃、一期の検閲も近いある日、連日の寒さと訓練の厳しさからか、体力も少し弱り無理がたたり風邪を引き、戦友から薬をもらい飲んだが一向によくならず、我慢と無理がたたり、夕方から熱が急にながって来た、でも点呼さえ終れば……、一晚寝ればまたよくなるだろうと思ったが、立っていてもふらつくのが分かった。週番司令が来た。

「気を付け。番号」班長の声も語尾が薄れその場に、倒れてしまい、後は何も分からない。(後から古参兵から知らされた)点呼中、しかも週番司令の目の前で倒れ、意識不明になってしまったのだから、こんなことも珍しいらしい。すぐ司令の命令があり、担架で部隊の医務室へ連れていかれたようだ。

応急処置をしたが、部隊では駄目で陸軍病院へ運ぶことになる。

当日は午後から猛吹雪となっており、夜も一向に止まなかつたらしく、運般に大変苦労されたようだった。

部隊から病院まで五キロほどの距離があり、雪の中を途中医務室の衛生兵もつき、班から十名選抜し輸送班を編成される。吹雪で雪も積もっているのに、担架で五キロの道を搬走、病状も一刻を争うらしく用意も大変。当時部隊に車は一台もない。馬はいるが荷車は使えない。

点呼が終って十時過ぎ、吹雪と吹き溜まりを乗り越えて一時間ほどの苦闘でやっと病院へ着いたとのこと。気が付いたのは夜中過ぎで、ベッドの

中に寝ていた。

そばに班長殿がいた。

「ここはどこですか」

「やっと気が付いたか、心配したぞ」

「ここは病院だから、安心して寝ろ」

兄貴のような優しい言葉だった。明け方再び目を覚ました時、班長殿がいなかった。熱も幾分下がったようだが、頭が重く胸が苦しい。看護婦がいたので「私はどうしたのですか」と聞くと、「あなたは夕べ点呼のとき倒れて夜中にここへ運ばれて来たのですよ、来たときは死人の様でしたよ」とのことでした。

自分でも点呼のとき、班内で全員が一行に並んでいること以外、一切分からないのだ。若い看護婦が交替で来る。どうやら専属らしい。

個室のような部屋だが、よく見ると奥にも部屋があるようで、聞くと将校が入っているのだという。私の病名は、急性肺炎だったようで、かなり重体だったとのこと。この部屋に入ってから、一週間ほどして身体も少し動かせる様になり三人部屋に移る。

班長殿は毎日来てくれ、班の古兵どのも交替で見舞いに来てくれ嬉しかった。郷里を離れ異国の地で、病院のベッドの中では殊更心細いものがある。

病床には ○赤、○黄、○青 の玉が付いている。これは各人の病気の軽重を表わしたもので、これで病院内での行動が決められている。

赤玉の者は重症病人で、軍医の指示で付き添いも付くし点呼は寝たきりで受ける。起きられる者はベッド上に座す。病院といえども朝晩の点呼は行なわれる。

黄、青玉の者はベッドの前に立ち点呼を受ける。しかし、三十七度以上

の熱があるときは、病状により軍医の許可があれば、寝身点呼を受けることが出来るのだ。

朝の検温があり六時三十分起床のベルが鳴り、赤玉以外の者は全員で自分たちの部屋と廊下を掃除しなければならない、これは朝夕の点呼前の毎日である。大部屋であると二十人位入っている。

入院患者でも院内の規律はうるさく、階級の上下はもとより病院の軍医、他関係者、婦長に対しての敬礼は、すべて停止敬礼でうるさかった。病院内外の雑役は青玉の元気な者を各部屋別に人数を割り当てられ、雑役に使われていた。看護婦も随分いたようであるが、ごみ投げなども一切せず全部使役にやらせる。

異国の再会

十二月末頃のある日、「村川さん面会ですよ」と看護婦さんが言ってきた。「公用証」を付けた上等兵殿が近づいて来た、見覚えがあるが思いつかない。

「仁羽だよ」

「陸別のトーフ屋の仁羽だ」との事。

やっと思い出した、同級生にも女性で仁羽さんがいた。その人の兄さんで八歳位年上かも知れないので、あまり交友はなかったが、確か家の近くの営林署に勤めていたはず。

仁羽さんと同じ佳木斯(チャムス)の他の部隊で衛生兵として勤務し、週に一・二回連結に来るとのこと、事務室の掲示板に北海道釧路支庁と書いてあったので、もしかすると予感として書類を見せてもらったところ、陸別町の村川と分かり急ぎ来たとのこと、遠い満州まで来て病気で倒れ

心細い毎日であった処へ、思いがけない同町の人が訪ねて来て呉れたのだ兄が訪ねて来てくれたような喜びであった。

仁羽さんは十八年に召集で来たとか、その後親兄弟の様子や陸別の人達の話などをし、自分の病状も係にいろいろと聞いたようであった。

「心配する事はない、たいしたことはない、何か不自由なものがあつたら持つて来てやるから」といろいろ気を遣つてくれた。

その後も時々来てくれ、いろいろな物をもつて来てくれた。

しばらく熱の上下変動が続き不安な日々であったが、正月を迎える頃には熱も安定してきた。郷里を出て三か月も立たない内に倒れ入院し、病床で正月を迎えるとは……郷里の親は、私がまさか入院しているとは夢にも思っていないだろう。

正月には皆故郷へ年賀を書くように、と病室の班長より言われ、書いて出す。しかし病氣(怪我)で入院している文面は一切書けず、平常勤務状態のことを書き、発信住所も平常部隊と変わらないのだ。

満州の正月、雪も多く毎日の吹雪だ……北海道の酷寒の地で育つた自分も、この連日に亘る猛吹雪と寒さにはいささかうんざりする。

正月も終り、半ば頃、仁羽さんから

「これはまだ余り他言は出来ないが、今度部隊の大移動があるようで、もう来る事が出来ないかも知れないが、早く元気になってくれ」と煙草を五箱置いて行った。

玄関まで見送り固い握手をしながら、この別れがどのような別れか、心の中で痛いほど知っているだけに、泣きたいようだった。終戦後の翌年(二十一年)仁羽さんは無事復員していた。仁羽さんは帰つてから両親に陸軍病院での事を話したとのことであった。

仁羽さんと分かれて数日後病院の中も慌ただしくなってきた、少し元

気な者はそれぞれ退院、部隊へ返される。病院の中も動員があるようで大きい荷が梱包され始め看護婦の動きも平常とは全く違う。

動員（加護演習）

二十年一月も末頃臨時診察が行なわれ、次々に帰隊の復帰の許可が出る。入院者半分位帰隊する一月三十日、他中隊の者と一緒に部隊より迎えに来た者の引率で帰隊する。

各部隊には加護演習、出動準備命令があり、中隊の中は「つた返しであつた。平常の内務班の厳しさとは、変わった雰囲気で古兵は少々浮き足立っている様に見える。退院した以上、動員の中に加えられるものと思つており心の準備も出来ていた。帰隊して二日目動員名簿が発表された。その中から自分の名前は漏れていた、悔しかった。情けなかつた。どうしてこんな大事な時期に入院などしたのか悔やまれる。本当のご奉公を出来る機会を逃してしまつた。

中隊長に直接

「もう完全に病氣は治りましたので、一緒に連れて行つて下さい」

と願つた。しかし逆に隊長より

「どこに居て勤務するのも国の為なのだから残留するものとして、後のことを頼む」

と励まされる。

出陣者が決まると、足の前から頭のとつぺんまで全部新品で支給される。持ち物一切新品である。食べ物も盆と正月と一緒に来たようなご馳走だ。よくも、これだけの被服、食糧、甘味品などがどこの倉庫にあつたのかと驚く。

ある夕食のとき、出陣祝いが催され一切無礼講、飲めや唄へのドンチャン騒ぎであつた。出陣式の予行などもあり、古兵はそれには慣れたもので四十キロ〜五十キロの完全武装で勇ましく見える。

動員から外れたものは、各班玉名く八人居たようで、彼等は発表の日から使役の連続、新品物の受領が多く、結構余録があり楽しむ。

二十年二月十一日。いよいよ出陣式が決行される。寒い風の強い日だつた。銃剣には全部白布を巻き、カーキ色に白色すべて新品なので色彩鮮やか、完全武装の部隊の出陣の整列は勇壮というか、軍隊の本当の姿を見た。

残留者で見送る者にも、その躍動が伝わつてきた。砲、馬、弾薬は前日の内に佳木斯（チャムス）の貨物駅に運ばれていて当日は兵員のみ移動、残留者は各中隊から数名使役し、書類その他の軍用行李などを車に積んで運ぶ。駅から何日出発したか、どこへ行つたかは不明。

敗戦色が濃い昭和二十年の始め、この加護演習の動員で満州部隊の駒を動かすことは、本土決戦を控えての動員だつたのだろう。北のソ満国境に引いている対ソ陣営も少数の残留部隊としたことも、「日ソ不可侵条約」があればこそ主力を沖繩に移動させたのだ。

このことが予想もしなかつた、ソ連の謀略により、後にソ連の侵攻を早めた結果になつた。

残留部隊（部隊再編成）

残留者は一個班で数名、中隊でやつと一個班位の人數であつた。

五分の一位の残留者、しかも病弱者とけが人ばかり、中にはちよつと元氣な者もいたが、どうしてこの人残されたのかなと、思う人もいた。

将校の中にも中隊付き将校は、平均年令も高く残された人もおりその人たちの指示に従う。

部隊本部の動員室の執行手伝いに行く。書き物が仕事であった。一か月位は出陣の後片付けで大変であった。軍馬のほとんどが出動し、残っているのは老いた馬ばかり、毎日使役と馬の世話だけ、教育も無い。兵器は一切ないので演習も無い。

天気の良い日には将校に、銃剣術の相手をするくらい。(青年学校当時、若干銃剣術をしていたので少々は相手ができ、将校も満足していたようだ)

その後銃剣術の訓練をする、木銃と木剣の対戦訓練であるが、初めてである者が多く初年兵ながら代用の助教になったり、試合の見本を見せたり大変。

四月に入り初年兵や召集兵(現地のもの他)。九州からの召集兵が多く、五十歳を過ぎた自分たちの父のような人まで入隊してきた。また初年兵は朝鮮人がほとんどであった。また同時に関西、九州・方面の学生も動員され、入隊してくる。どうやら、それで小部隊ながら新編成されたようだ。また、他部隊より若干の古参兵も、転属してくる。

部隊内の編成替えも終り、新しい教育に入る。

各中隊別に教育、訓練の始まりである。学生動員で入ってきた者も一旦、各中隊班に編入されてから両度部隊の中の学動者全員を、一か所に集めて下士、幹部教育として別教育に入る(二か月)二か月足らずの教育で下士や幹部になられたのでは初年兵や古参兵はたまったものではない。

三か月もすると桜形の記章を付けた伍長だから一応下士官である。教育訓練も正規の兵器もないので、説明も訓練も出来ず初歩からの

始まりである。徒歩教練も受けたことのない初年兵老兵の集まりなので「氣を付け」「右向け右」「左向け左」「回れ右」「隊列更新」部隊の中でこのような訓練である。

これらの指導に当たる古参兵が少ないので、青年学校出身者がその助手となり教練が始まる。勿論銃は少ないので、無駄であるから青年学校初期の訓練風景である。古兵(指導員)はこのような訓練など馬鹿らしく、我々に任せ自分たちは他から見ているだけ。

それでも上官が来ると、うまく答弁しているのだろう。どのような訓練をしようと地方とは違い軍隊であり、部隊の中での訓練であるが、厳しさは違う。

戦場である南方方面、支那大陸から遠く離れた満州の地であるが兵器一つ無くこんな教練などとしていて良いのだろうかと不安な毎日であった。

進級もし、二等兵(先輩)としての毎日も不安で一杯。四月に入り動員後各機関の兵も少なくなり再教育の為の募集があり、初年兵、二年兵は皆受けさせられる。初めは憲兵の募集であった。班ごと試験をする初め二十五名ほどいた中から、二十名くらい合格する。

次は中隊での試験だ。八十名くらいの中から五十名くらい合格する。次は部隊内の一、次試験(試験内容もだんだん難しくなる)

二百名くらいの中から三分の一くらい合格。

二次試験で更に三分の二、三次試験でまた三分の一、残った十名が口答試験となり、五名の合格者を出す。(部隊最終)

最終試験合格

班でも羨望の眼差しを受ける。自分でもよくここまで来たと思う。班内でもう一名おり、班長もまた中隊から二名で、発表の時、中隊長もわざわざお祝いに来たほどだった。部隊内から五名選出することは五名の割り当てで、憲兵隊採用確実と言われていた。

いよいよ憲兵隊本部に行く。部隊から五名が、将校に連れられ（下士官一名）佳木斯（チャムス）の憲兵隊本部へ。各部隊からもそれぞれ数名来ていた。

ここでは時候の感想文と心構えなど書かされ、若干の口答諮問、最後に憲兵隊長との面接だ。

先に感想文の内容など若干聞かれ、親兄妹のこと入隊前の病気のことなど聞かれる（このような処まで身元調査の書類が来ていることにびっくり）

「君は大変成績は優秀であるが、若干体が弱いようである。この隊は極めて厳しい処であるから今回は諦めて欲しい、他にも奉公の道はある、頑張つて欲しい。ご苦労さん」との言葉。

ここまで来て身体で落とされ情けなかった。（後に敗戦になりこのとき憲兵にならずに良かったと思っている）

再教育（暗号）

その後すぐ、今度は（四月の末）暗号兵の試験がある。

各班より推薦を受けた者が、部隊の試験を受ける。百五十名くらいいた者を、二回の試験で振り分ける（国語と算数）。合格者十五名。（トップで合格する）それから三か月間の講習を受ける。

佳木斯（チャムス）師団司令部の講堂で、司令部暗号室の将校と下

士官の教育を受けるのである。（部隊から司令部まで、約四キロメートルある）

入隊当日は、部隊本部に集まり部隊長の訓示を受け、本部付き下士官に引率されて行く。司令部に着くと各部隊からも来ており、五十名程集まる。当日は入講式と講師の紹介、教育の内容などあり午後早く帰隊、次の日からは弁当持参毎朝七時半出発だ。

毎朝、部隊本部前集合の決まりで集合する。軍曹が待っていて

「今日からお前たちだけで行く」といい、

「引率は村川一等兵おまえがやること」

「昨日俺がやった様にすれば良い、司令部に入る時は向こうが分かっているから心配ない。営門を出るまで俺がついて行く」

営門の出入りをあまりしたこともないのに、突然の大役、皆同年兵で経験もなく、命令されれば仕方なく従う他なし。兵隊を十五名も引率して営外に出ることは大変なことなのだ。途中いかなることに遭うか分からない。

営門の処へ行き、営門の指令に話を通し軍曹の指揮で一回通過して見本を示す。中への入り方も同じ要領で指導。

村川が指揮し、出入り三回目で無事通過。軍曹より

「途中将校の出勤時間だから欠礼だけはするな」と言われる。

営門を出ると全員歩きながらその見張りが大変。

途中将校に出会うと「全員歩調取れ、頭右」の号令を掛ける、将校も怪訝な表情で答礼をする。そうだろう、十五名位の兵隊を一等兵が引率しているのだから・・・

一度将校に止められたことがある、（将校はすべて乗馬）敬礼をして過ぎようとした時

「その分隊止まれ」と言う、私は分隊を止めて

「村川一等兵参りました」と将校の近くへ行く

「引率者はお前か」若い将校だ。

生意気そうだが、固くなっている。

「下士官はいないのか」と言う、

「ハイ居りません」

「どこの部隊か、どこへ行くのか」

立て続けに聞く、それに一つ一つ返答する。

「よし分かった。行つてよし。」

それだけ言うと、馬を走らせて行つてしまった。どこか他の将校らしい。さあ、道草を食つただけ遅れを取り戻す為駆け足だ。

司令部内では一・二等兵の姿は珍しく、ましてや初年兵など子供の様に見えるのであろう。

司令部内にいる人は、下は下士官（伍長）から上は將軍まで、佐官級はざらにいる。他は私服の軍属だけで、司令部内は通達で初年兵の教育の件が、みな分かっている。少々のは皆笑つて答えてくれる。司令部内は不案内。司令部の営門出入りは、いつも何の問題もなくスムーズに出入り出来た。煩わしいのは部隊の営門の出入りだ。

ちよつとのことにも「ケチ」をつけやり直しをかける「ちやかしと妬み」半分で面白がつてやることもある。「頭右」が揃わないとか、手の振り方が悪いとか、変な処に「ケチ」をつけて、やり直しを掛けて来るのだ。

余り時間を掛け講習に遅れると大変、本部からお目玉を食うのでその辺承知の上。毎日の講習も大変、一日中机に向かつて数字の組み合わせ、頭の中は一から九までの数字でぐるぐる回る。

数字の組み合わせから解説、軍隊でこれほど一日中数字を書こうとは思わなかった。

そんなある日思わぬことが起きる。

帰隊し点呼後、左足がズキンズキンと時々痛む、変だと思いつながら床に就く。明け方より左足クルブシの辺りの痛みが激しい。起床と同時に足を下に付けたがまだ歩ける。不安もあつたが休むわけにもいかない。少し腫れもあつたが何とか靴は履けるので、少し我慢をして何時ものように出る。

営門を出てからは列の後部につき、代理に指揮を任せてどうにか司令部に入り、何時ものように教育が始まる。腫れてきた足で四キロも歩いてきたので、無理がたたつて、十時頃には椅子に座つて、足を下げているのでたまつたものではない。足の腫れと熱で、頭の中はポーツとしてきて我慢が出来ず、隣の者が私の様子に気づき

「どうした」

と声をかけてきた。

「足がこんなになってしまつて」と言うと言つて戦友もピクリしてすぐ教官に伝えてくれ、教官と共に司令部の医務室へ行く。

再傷病（司令部転属と教育）

初年兵教育の兵が緊急患者なので軍医もすぐ来て診てくれる。

「こんなになるまで良く我慢出来たなあ」と驚いていた。

これは一か月程前、厩で馬に水を飲ませるときに、蹴られた跡が内出血して居り今それが化膿し始めたのだつた。

すぐ二、三か所メスで切つたが、化膿し始めたばかりなので、ドス黒い血

だけが出た。もう少し化膿してから手術をしなければならぬとのこと、入院しなければならぬとのこと。

教育班長（将校）にお願いし、何とか入院しないで治してもらえないかと、別室で相談してもらい、班長が司令部の週番指令などと相談し、個室のあき部屋（当時司令部の運動用具を入れてあった処）を片づけ入ることになった。

部隊に司令部から連絡を入れ、内務班長が連絡に来る。軍医の命令で付き添い一名必要とのこと、二人分の私物一切、その日の夕方までに部隊から運んで来る。その日から二人は司令部転属命令が出る。

軍隊に入りこれで二回目、とんだ厄介者だ。

入院だけは免れたが、重病人なのだ。一週間程は毎日軍医が来てくれ、後は時々衛生下士官が来る。司令部とちよつと離れた処にあり、来ては息抜きをしていろいろ日本の状況などを話し合った。（何年も日本を離れ満州暮らしの人ばかりなので無理もない）

付添の戦友は食事の上げ下げや、身の回りの世話の時以外は教育に出る。夜は班長か班付きと一緒に寝ることになっていたが、暗号班は夜勤が多くほとんど一緒に寝ることではなく、時々様子を見に来るだけ、初年兵二人だけだ。

内務班に居る時のように、寝ても起きてても古兵に気を遣うこともなく、安心して居られる処であった。

司令部内にも朝夕の点呼はある。指令と週番下士が居て点呼が行なわれるが、将校と下士官ばかりだ。点呼の時間になると暗号班長が来る。半月ほどは就寝点呼であった。

二週間程で腫れも引いてきた。二二二日は熱もひどく、軍医も夜中でも見に来てくれて、親切にしてくれ本当に嬉しかった。食事も部隊とは

比べものにならない位良く、特別扱いのような待遇であり、おかずなど特別に多く呉れた。

ご飯でもおかずでも残り、部隊から来る仲間に加え、喜ばれた。軍医の許可が出るまで、寝ていなければならず、しかし、教育の方も進むのでその都度進行科目を床の中で勉強し、分からないときは、班長が来たとき質問し勉強を続ける。

二週、三週たつうちに司令部内に、我々が宿泊していることが知れ渡り、見舞いに来てくれる将校さんもいて、本当に嬉しかった。松葉杖を突いて、渡り廊下（目板敷き）をケンケンしながら渡っていると、わざわざ将校が来て背負つて、渡してくれたこともあった。

この時の将校さんは大佐であった。その後菓子をもって見舞いにも来てくれ、涙が出るほど嬉しかった。

便所は司令部のものを使っていたので、将校の方と接する機会も多く、会う人皆言葉をかけてくれた。一度小用の時隣に人が来たので、見ると少将である、慌てて会釈をする（未だ出ているので、手は離せない）と、「どうですか傷の方は」と言われたのでビックリしてしまい

「ハイお陰様で大分良くなりました」と答えると、「それは良かった」と言つて去つて行った。

胸がドキドキ高鳴っていた。

一か月くらい過ぎ、杖を突いて歩けるようになり、教育に出席し、医務室での診療を受ける。

思いも掛けぬ足の故障で、苦しい思いをしたが教育の厳しさも、司令部の個室での生活は夢のようで、多くの将校さん軍医さんのお蔭で、楽しい二か月であった。

教育が終る頃には杖無しで歩けるようになり、後は手術の傷が少し

残っているだけになった。終了の次の日、部隊から車で迎えに来て呉れる。再び司令部からの転属の書類の関係もあり、送り迎えとなった。司令部の軍医から治療の書類をもらい、部隊の医務室へ提出し、帰隊してすぐ入室し、二週間位で退室する。

当時、部隊に迫撃砲が配備され毎日その訓練が行なわれた。

ある日、人事の方から中隊事務室勤務を命ぜられる。この頃ある夕食後、班長に呼ばれて下士官室に行く時、

「村川お前、手紙の文章も字も上手だなあ」と言う、

「俺の手紙を代筆して呉れないか」

夕食後いろいろする事があり、ちよつと返答に困っていると

「心配ない、後の事は（古兵）に話しておくから」という事で了承する。

「ここで書いて良いから」と席を空ける。手紙を一通出し

「これの返事を書いてくれ」女性からの手紙なのだ。

「お前の思ったとおりに書けば良いから」

これには全く閉口する、班長の恋人への返信なのだ。手紙の代筆は家で両親のためにしたが、恋人への代筆は初めてだ。軍隊に入るといろいろなことを経験できる。

他人の手紙を読むわけにもいかず、躊躇していると、

「読んでもいいよ、読まないよ返事は書けないだろう」

との事で読ませてもらう、やはり恋人らしい女性からである。どうにか文もまとまり、書き上げて夜の点呼準備の為引上げ点呼後また行くと、文面を読んだらしく「ここに」して、

「うん巧く書けている、これは彼女びっくりするぞ」

と喜んでくれた。

我ながら巧く書けたかと内心ホツとする。住所、宛名を書き、班長に渡す。同室に五・六人の各班長と班付下士官がいて

「今度は俺の代筆も頼むぞ」と言い出す始末、困った上官である。

それからは彼女から手紙が来るといつも代筆を頼まれる。誰の恋人だか分からない。お蔭で手紙を書くときは下士官室にいるので、使役もなく班内のこと、先輩の事などする事もなく、班長の事をしているので、誰も文句を言う者も居らず、平穏な日々であった。家での手習いがどこで役だつか分からないものだ。家に居た暗から、書く事と計算は得意として居た。

ソ満国境の陣地構築

事務室の仕事にも慣れてきたある日、人事係の特務曹長から呼ばれる。

「村川お前、俺と一緒に山へ行かないか」

当時各部隊から、ソ満国境に陣地構築のため派遣されており、我が中隊からも二個小隊くらい出動していた。

曹長も部隊の派遣で行くのだが、一人なので自分を連れて行くと言うのである。嫌とも言えず

「一緒に連れて行って下さい」と返事をする。

出発と持ち物の指示を受け用意する。先鋒隊より下士官が迎えに来ていた。若干の荷物は軍属の人が乗船場まで運んでくる。

佳木斯(チャムス)市街の北方、街外れの松花江(満州一の大河)の船着き場である。松花江はソ満国境を東西に流れている黒竜江(アムール川)北東国境付近から分かれている支流であるが、満州の中部

を東から西へ横断し一部内モンゴルに達する大河だ。

徒歩で佳木斯(チャムス)市街を通る。あちこち説明してもらい、初めて見る珍しいものばかり。物資の少ない時とはいえ、古代の珍しいものが多くあり、大陸独特の建物や店の構えなど衝から離れるにしたがって、建物も悪く貧困が一目で分かるようだ。

船着き場には客船が着いていた。百名位乗れる船だ。松花江には多くの荷物を運ぶ船と船が行き交い、交通の要衝として重要視されていた。川を上下するので動力で水車の丸い翼を左右に付けそれで上流へ進むので速度は極めて遅く流石にのんびりとした大陸的な旅だ。

江の兩岸は葦原で山らしきものもなく木もあまりない。江の上を行く船なので揺れはほとんどなく江の中央や瀬を上手に上流に進む。

食堂もあるが、ここは作つて売るだけのところで、木の葉のような器で使い捨て(川へ流す)。食品はコウリヤン飯や栗めしで、これを油で炒める味が付いて結構美味しい。

乗船者も日本人(開拓民のよう) 満人、兵隊、様々な人が乗っているが、やはり満人の方がはるかに多い。大小便の使用する部屋はあるが、下は川の水(垂れ流し) でちよつと恐ろしい感じがした。二日目になつても相変わらず同じような景色のところを進んでいる。

聞くと松花江の支流に入っているとのこと、支流になつても江幅は相変わらず広く、水は満々と流れる大河である。

二日目の午前やつと下船する。ここから満人の馬「単」に乗ったり、歩いたりして進む。右も左も山らしい山もなく、丘陵地帯で大きな木もなく荒涼とした一本道を進む。

この辺りは狼が出ると言うので時々笛を吹く。それを聞いただけであまりいい気持ちではない。真夏なので、蚊や虻がやたらに多く葉の付いた

木の枝 で払うのが大変。上り、下りの道を急ぎ、日も長いことながらやつと夕方目的地へ着く。

小高い処に木組みの掘つ建てに天幕を掛け、中の木の骨組みの上に板を並べただけで、そのうえに仙延を敷いただけの寝台である。悪い処に来たなあ……と思つたがもう遅い。野戦地もいいところ。

馬も五・六頭いる。馬小屋は骨組みに、屋根には天幕だけだ。薄暗くなつてくるにつれ、深い霧が出てくる。近くを流れる黒竜江からくる霧なのだ。

いよいよソ満国境へきたのである。地名は不明だが黒竜江省の北満国境であり、最前線である。

先発隊は若い幹候出の少尉であるが、指導権は軍曹の方が上の様であった。幹部候補生は旧専門学校以上の学徒出身で、軍隊の経験も浅く一定期間幹候の桜の記章が取れない。

黒竜江はソ満国境を形成し、モンゴル共和国に源流を持つ揚子江と並ぶアジアの大河である。黒竜江省は丘陵地帯が多く、特に部隊が駐屯した地区は河岸のため丘陵の先端で、沢は深く刻まれ河岸は深い葦原で、とても河岸に近寄れる状態ではない。

河幅は三百〜五百メートルもあろうか、流れているようには思われな

い。天気の良い日は霧もなく対岸ソ連領が見える。葦も少なく丘陵で木一つない草地。兵隊の人影もある。北満国境に急遮障地構築として各部隊から配備されたのも、それまで昭和十六年に日ソ不可侵条約が交わされていたので、防備も薄くほとんどの部隊が南方方面に移動していたのである。

ヨーロッパ戦線が終局に近づくにつれ、ソ連の動きが極東へ走り出した

ため、それに対する防備であつたようだ。

関東軍の大動員で、満州が部隊の手薄になつた間隙を衝いて、ソ連軍のヨーロッパ戦線の戦勝により、極東への連日連夜の移動も目にする事が出来る。これに対し防衛策とはいへ、砲も無く個人の銃すら全員に配備されていない状態なのに、陣地構築とは、ドロボウに縄なのである。いわゆる偽装陣地なのである。

我々兵が分かっている事でも敢えて軍司令部の命令であれば動く他ない。本道から丘陵地までの木を（すべて小木太くても十センチ位）切り開いて二メートル幅の道を作るのである。各班砲座の位置を決められる。そこまで本道からの道は各班が決めるので、班同士が対抗的になる。しかし地形が異なり進行に至つては作業も大変である。

いつどこから持つてくるのか分からない砲のために、蚊や虻に悩まされる作業も、すべて人力。木を切り、根を起し、地ならしし、少し太い木は杭用に使用する。

天気の良い日は蚊と虻に攻められる。天気の悪い日の方が少しはましだ。雨の日も風の日も作業が続けられた。夕方帰舎すると管内のような厳しさもなく、勤務以外は体を休めるだけ、勤務は既の不寝番と導哨の警戒である。

不寝番は「オオカミ」から馬を守るため、近寄らないように火を焚く、更にこれを消さないようにする。余り大きな火にすると薪がなくなるので加減が難しい。遠くでオオカミの遠吠えが聞こえる。一頭が鳴くとあつちの丘、こつちの丘で次々に鳴き出し、闇夜に霧の中で聞くと身震いがする。

夜になると大陸特有の気候で闇夜となり深い霧となる。導哨はこの一寸先も見えない処を警戒に歩くのだ。オオカミが近付いても先ず分から

ないし、襲われたら銃を持っていても先ず無駄だろう。

導哨するときには二人が前後ロープでつないで進む、一メートルのロープでもぶつかるまで分らない、わずか数百メートルの導哨だが不安いっばい、それもオオカミの遠吠えを聞きながらの導哨は大変だ。

本部までの連絡はすべて乗馬で、オオカミに襲われるのでそれを防ぐ手段だ。仮装陣地と思ひながらも作業を続ける。

炊事場には炊事班があり近くの沢に小屋が建てられ、釜がありここで食事を作る。幕舎から炊事場までは急な坂だ。道は無く自然に出来たジグザグ道、標高百五十メートルもあるうか。急な斜面であり沢なので毎日の食事当番も大変。雨の日などはなおのこと、この炊事場が沢の中にポツンとあり食糧もあるためオオカミの標的になり、大騒ぎが再三あつた。

日ソ開戦

日本軍が各地戦線での敗戦、玉砕の戦況は一切将兵には知らされていなかった。しかし昭和十九年秋も深い頃に入隊してきた者もあり、ある程度のことには知り国状も分かっていたのである。北満の国境に行つてからは尚の事。

昭和二十年八月九日未明、非常呼集がかつた。

日ソ開戦の命令が伝えられた。戦闘態勢に入る。当時、ソ満国境重要地点の警備隊や各地駐屯部隊には重装備の兵器もまた兵員もいない。

二月上旬動員で関東軍の主力部隊は沖繩方面へ出動し残番の弱小部隊だけ、到底戦いにはならない。当時日本はソ連と昭和十六年四月に、日ソ不可侵条約が締結されていたが、ソ連軍はヨーロッパ戦線で連合軍

と合意し、ドイツの敗戦そしてワルシャワ条約でヨーロッパの戦力を極東に移し、一方的に条約を破棄して侵攻してきたのである。

終戦わずか一週間前、背後から満州の弱体を知っていて条約を一方的に破棄しての謀略的な侵攻をした。卑劣な行動であり、我々としてもこの条約を分かつていただけに、実に卑劣なソ連と違っていた。

如何なる条約があるうと、戦争を仕掛けられ、卑劣などと言っていられない、戦争は生か死だ！

主力を取られた現存部隊では、ソ連軍の機動部隊と何倍もの兵力を抑え戦うことは不可能に近かった。しかし、一部東部「綏芬河」地区の戦闘は激しかったと後で聞いた。

我々の方面に侵攻してきたのは、ハバロフスク方面からの部隊らしく機動部隊で侵攻も早く、機動兵力に押され、各地の部隊も小部隊で、兵器も少なく防戦には至らなかつたようだ。

我々先鋒隊は佳木斯(チャムス)の本部隊と合流すべく、現地より西方の方正という街に向かう。兵器と言つても小銃だけ弾薬はわずか。しかも銃は三人に一丁しかない。

各人帯剣だけ、とても戦える戦力ではない。本隊を待つしかない。方正まで百数十キロメートルはある。丁度その頃連日の雨降り道は泥沼のようだ。出発に先立ち必要以外は焼却し荷車に載せ馬に引かせる。

ここ銃剣術の木銃まで後で何かに使えるからと積まされた。途中悪路で悪戦苦闘、極必要なもの以外次々に車から捨てる。丘と谷(沢)の連続で平地は泥沼の道、小川は各地とも増水して渡るのも大変。

夕方一つの部落へ着き、村の責任者と話し合い、兵隊の宿を確保、土地の者も日本軍不利の戦況が分かつており、余り協力的ではない。むしろ早く行つてくれと言わんばかりだった。しかし、天候も悪くここで二泊、

再び方正へ向け出発した。

途中この辺一帯は開拓移民団が多くあると、満人より聞き偵察に行く。広々とした土地であるが荒野の中、収穫は終っていた様だが、あまり良い出来とは思われない、家を見付け行ってみる。ひどい荒らし方だ、移民の人は開戦を聞き一団となって、集結場所へ移動したのであろう。

北満開拓移民

一軒家で日本風の木造に土壁の家である。荒涼とした平野にボツンとただ一軒、同胞の民家と言つても一キロ以上は離れている。この広い荒野に入りどれほど苦しい生活をしてきたことか、この地に行つて初めて開拓民の現実を目の前に昭和十二年頃のことを思い出す。

その当時、日本全土から満州開拓団の募集が行政で行なわれた。小作農家の多いとき一家で行く人、親だけの人達、我が町からも多くの希望者があり同級生の中にもいた。

支庁である程度まとまると臨時列車を仕立て出発して行つた。政府から若干の補助金を受け現地で何町かの土地の支給を受け開拓する。自分たちの土地、畑が作れる農民にとっては、夢のような魅力ある話(過言)につられて、大陸には広大な土地がいっぱいある。甘い話にはウラがあると、昔の人は良いことを言つたものだ。

政府の甘い話に野望があつたことも知る由もなく、一抹の不安と希望を持ちながらも何万人という開拓団を送り込んだのだつた。開拓地はほとんど北満が多く、冬は酷寒零下三十〜四十度となり、広野なので風をまともに受けるのだ。風の日は零下五十〜六十度の寒さであつたらう。仲間の家に行くにも一キロ〜二キロも離れ苦しい開拓の日々だつたと思

う。その上オオカミも多く並大抵の生活ではなかったらうと思う。

満州の土民はすべて集団で小部落を形成し、周囲を土塀で囲い外敵を防ぐ方式に対し、日本からの開拓移民は一軒家で隣までは一キロ〜二キロも離れている何と無防備なことか。

軍の目が光っていたとは言え心細い生活であつたらうが。二十年に入りほとんどの家から男が召集され、残された婦女子だけの生活、北満の果て心細いと言うより恐怖の毎日だつたと思う。

移民の家を見て、また逃避の姿を見ても分かることであつた。海山越えて無事に日本へ帰れるだろうか：北満から南満、そして釜山まで夢のような距離だ、まして婦女子ばかりが：生と死の逃避が続けられる。

この移民婦女子と逃避を共にしたことがあつたが、この有様は、一生暇の奥から消えることはない。移民が去つた後、めぼしい物は満人が持ち去つたのであろう、何一つ無く、窓や戸板も外されて無く、残りは若干の紙屑だけ、一層の哀れさを感じる。

移民の逃避行

八月より降り出した雨は一向に降り止まず、道は相変らず泥沼のような道、斥候を出し状況を把握しながら進む。道は各所で寸断され谷川となつている。荷車に積んである若干の食糧と少量の弾薬はどうしても確保せねばならず、

「どこまで続くぬかるみか：食もなく」唄にもあつたが、今現実はその状態のなかにいるのだ。よい連絡は全く入らない、ソ連軍の侵攻が早く応戦の様子も無く敗退の様子ばかりが入ってくる。

途中の小部落での宿泊も安心して寝られず、満人の中には日本軍に見

切りを付けている者もいて、非協力的でなかなか言うことを聞かない。少数でいると襲われる危険性も出てくる、一部不良満人が横行し始め移民を襲う。兵隊であつても少しの処でも単独行動も出来なくなる。

三日目あたりから移民の逃避に会う、ほとんど婦女子で老齢の人が付き添い歩いている。皆着の身着のまままで全身泥だらけ、子供など目だけが光っているようだ。

顔にわざと「スミ」を塗っていた人もいる。人相を消すためだろう：顔を洗つたらさぞ美人であろうと思う。河の増水で泥橋も落ちた処がある。移民と会えば、彼女らを安全な処まで送らねばならない、橋の落ちた処では、移民の一人一人を背負い、手を引いて河を渡る。

小さい子供も泣きもせず、歯を食いしばっている。その姿を見るとこちらが泣けてくる。逃避行途中の悪路の行軍、そして婦女子の同行では進行も遅い、男子が同行していないので聞くと、全員現地召集で召され、女子供だけ。少数の男子は六十歳以上の人だけ三日目の夕方どうにか目的地の方正に着く、満州の街や部落には、四方に高い塀を回し（二メートル〜五メートル）四方に門があり入り口の戸も頑丈なもので警戒も厳しい。

同じ国の中でも街や部落民が共同で外敵から守るための塀がどの街や部落にもあつた。農地は塀の外にあり毎日の仕事は外へ出て行くのだ。門の出入りはかなり厳しい。方正には佳木斯（チャムス）司令部の先鋒隊が入っていた。ここで無事に安全な処まで行けるように移民の人たちを渡す。

我が本隊は未だ着いていない。諸によると本隊は移動中で、ソ連の飛行機により攻撃を受け、大きな被害を受けた模様で、バラバラに行動しているとのこと。

よい連絡は一つも無い。その上悪戦苦闘の行軍で体がぐたくただ。そ

こゝまた指示が来る。

我が部隊の駐屯地（集結場所）は方正の南方十五キロ程行ったところの部落らしい。一時休息の後、明け方早朝出発、左右コウリヤン畑の中の一本道だ。どこまで行つても三メートルもあるコウリヤン畑が続く。

道は二メートル位の幅で両側は深そうな溝になつていて、連日の雨で沼のようだ、流れはあまりない。

午前中には我が隊は皆無事に着く、二十戸位の小部落だ。各中隊、班別に宿舎が割り当てられ、やつと落ち着く。それから二日後本隊も到着する。しかし武器はほとんどなく弾薬も少量、我々より少ない。我々の三倍の逃避行軍の上、爆撃を受け部隊から持つてきた物もほとんど減らし、敗走してきた様子であった。